

第9回「新鋭俳句賞」一覧表

NO	所属結社	俳号	題	岩田	白濱	南	山西	計	
3	なし	タムラ テンナン 田村 転々	月光	4				4	
15	いぶき	さざなみ葉	オオゴマダラの翅	3				3	
17	少年	坂西涼太	こゑなくも	2				2	
23	森の座	ホクト シン 北杜駿	白露			3		3	
26	鴻	鈴木崇	ジージャン		5			5	
28	ひいらぎ	モリ マサノリ 森雅紀	命	5	3			8	準賞
31	知音 いつき組	稲畑航平	捕虫網			2		2	
34	阿吽	吉田哲二	息	1				1	
35	なし	ジェイミー・ロビンソン	紙芝居		4			4	
44	風土	ムグルマ カナ 六車佳奈	金魚			5		5	
47	南風	笠原小百合	ふあん				4	4	
48	鷹	鈴木沙恵子	斜(なぞへ)				5	5	準賞
55	ランブル	篠原新治	ポテトサラダ			4		4	
67	街	タカモ サチコ 高勢祥子	原稿用紙				2	2	
70	バビルス	カクマタ フミ 勝俣文庫	連弾の椅子				3	3	
72	炎環	齋藤なごみ	指切			1		1	

第9回 新鋭俳句賞 候補作品集

2025. 10

公益社団法人 俳人協会

第9回 新鋭俳句賞 候補作品集

【目次】

作品の字体・仮名遣いは応募原稿通りとさせていただきます。

72	70	67	55	48	47	44	35	34	31	28	26	23	17	15	3	受付 番号
指切	連弾の椅子	原稿用紙	ポテトサラダ	斜 なへ	ふあん	金魚	紙芝居	息	捕虫網	命	ジージャン	白露	こゑなくも	オオゴマダラの翅	月光	題
17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	頁

1 髪切つてまぶた明るし鶏頭花
 2 秋声や少しく読みて帯はづす
 3 目つむりて呼吸の音や青蜜柑
 4 あんぱんの餡の雲めく秋祭
 5 三人や紅葉の墓に手を合はせ
 6 手袋やゆふべを鳩に付きつきり
 7 また風が来て隠れたる焚火の子
 8 波斯の絨毯にして我が仰臥
 9 木の簷に木の皿使ふ時雨かな
 10 空港に千のたびびと山眠る
 11 べんたうを広げて鴨の見えてきし
 12 狐火を忘れ得ぬまま玄関に
 13 噤むべしさへづりの樹を前にして
 14 あたたかし木魚の中の闇が鳴り
 15 水草に蝌蚪ぶつかるや引きかへす
 16 月光に石段高し空海忌
 17 貝殻の影かさなりぬ花疲れ
 18 春服やマイク通せば声が違ふ
 19 乾拭きにうつすらみづや桃の花
 20 新緑をうしろに象の糞大さ
 21 転がつてきてハンカチで受け止むる
 22 ハンガーの横に風鈴掛けてあり
 23 靴下を干す十葉のまうへかな
 24 河童忌の信号待つてゐる人ら
 25 それつきり玉嶋の雌来てをらず
 26 爽やかや雲を抜く鳥抜かぬ鳥
 27 稲妻やくれなゐに積む海老の殻
 28 樹より降る水をつめたさ馬肥ゆる
 29 盂蘭盆会おほき鏡も湯気の中
 30 神戸港歩く耕衣の忌なりけり

オオゴマダラの翅

- 1 看板の「町」は下より灼けにけり
- 2 蝉しぐれ奥に傾く十字架よ
- 3 ハイビスカス鉄柵越しの海と墓
- 4 終戦日吹奏楽の鎮まりぬ
- 5 決勝の校歌は聴かず赤とんぼ
- 6 顔のなきシーサーひとつ残暑なり
- 7 盆波やされいに話す標準語
- 8 芒野の暮る自転車は矢のごとき
- 9 月桃の葉の湿りたる良夜かな
- 10 墓守と運動会を見てをりぬ
- 11 菓子折りに煙草の匂ひ都鳥
- 12 歩いては止まる翁の小春かな
- 13 聖夜なり基地の灯りはマツチほど
- 14 またしても敬語崩せず年忘
- 15 蓮の葉の縁のきらめく淑気かな
- 16 路地裏の緋寒桜の濃かりけり
- 17 片耳の聞こえぬ友へ寒見舞
- 18 立春や窓辺の鳥のふくらみぬ
- 19 草の丈追ひ越しさうな董かな
- 20 蛇穴を出づ選挙カー皆去つて
- 21 皺のなき茶の作業着や蜆汁
- 22 鳥雲に海兵隊の荒らす町
- 23 花時や二匹の鯉の離れたる
- 24 隣席の異人の食むや茗荷竹
- 25 だんだんと近づく機影黄砂降る
- 26 玻璃越しのバーカウンター花は葉に
- 27 洞窟を出づれば風の薫りけり
- 28 螢火や良きことはみな語らずに
- 29 日輪へ発ちたる機首や夏の海
- 30 沖縄忌オオゴマダラの翅欠けて

- 1 初弥撒の鐘あかときの天へ打つ
- 2 啼き終ふを待ちて啼きけり初鴉
- 3 公魚のあつといふ顔揚げあがる
- 4 紙地図の指に力や東風荒れて
- 5 ふらここの弧のすれすれの潦
- 6 挫けるも寝転ぶもゐて葱坊主
- 7 桜薬ふる大小屋の跡かたに
- 8 子には子の秘密満天星躑躅咲く
- 9 有り丈の風呑み干さん鯉幟
- 10 梅雨湿り聖書解してより開く
- 11 ハンカチに包むおはじき老牧師
- 12 白シャツの子を白シャツの抱き留める
- 13 氷菓食ふいま垂れさうな所から
- 14 夕虹に集ふご近所湯浴の香
- 15 まづ嬰に乳ふくませる洗ひ髪
- 16 幼子のままの甚平筆筒中
- 17 息災を子に願はるる星祭
- 18 一国に朝日満ちたり稲埃
- 19 波線をなぞる波線小鳥来る
- 20 猫鼻をひくつかせゐし颱風裡
- 21 新米の研がるる音を譜に起す
- 22 べいごまや年長の子が手を添へて
- 23 ねがへりのあとひと息や冬の山
- 24 とめはねの滲む文受く夕時雨
- 25 凧を帰り来し妻髪括る
- 26 玻璃戸から細き冬麗聖書置く
- 27 水鳥の水鳥に寄る寄らぬあり
- 28 こゑなくも祈る白息天へ向く
- 29 年忘後ろ歩きに別れ合ふ
- 30 子の指の地球儀を駆け小晦日

- 1 早春やつづしるやうに湯花湧く
- 2 春めきて誰のものでもないベンチ
- 3 山焼の炎剥がれてゆくやうな
- 4 遊び着のままに寝落つよ花の昼
- 5 花菜晴電線嶺々を継がれゆく
- 6 八十八夜嬰兒両手で立ち上がる
- 7 風船をリュックに繋ぎひと眠り
- 8 新茶汲む妻や指先揃へつつ
- 9 泉湧く一樹一樹の張りつめて
- 10 かたく結ふものに抱き紐えこの花
- 11 白南風や爪立てて剥ぐ絆創膏
- 12 みどり児の手の鳴る方へ青蛙
- 13 山国のプール開きとなりしかな
- 14 嬰の摘むよべの雨つぶ茄子の花
- 15 猫舐むる吾が掌真白し終戦日
- 16 白露降る播鉢の粥なめらかに
- 17 小刻みにあやす嬰兒つづれさせ
- 18 子を寝かし付けて柿剥くふたりの夜
- 19 月明を借りて授乳の背丸し
- 20 夜泣き子に眠り剥がさる星月夜
- 21 峰々になびく旗雲運動会
- 22 立冬や玻璃戸磨けば玻璃の鳴る
- 23 魚煮るや木がらし色の三温糖
- 24 冬の蝶ひよめきほどに翹ふるひ
- 25 夜々ひとり階段のぼる冬の音
- 26 子をおぶふ昨日も今日も着膨れて
- 27 唸りつつストーブ点きぬ夜明け前
- 28 野菜の端入れてみそ汁十二月
- 29 妻留守の夜空に寒の月を置く
- 30 北おろし一村の端めくれさう

ジージャン

- 1 鳥渡りくる要塞の島に居る
- 2 海風にひと揺れしたる秋薊
- 3 草木染の布の風合ひ秋深し
- 4 レコードの木箱を漁る冬帽子
- 5 踊り子のスパンコールよ冬薔薇
- 6 ぼこぼことサイフォンの沸く冬至の日
- 7 一陽来復スタンプ印に力込め
- 8 冬の蝶切岸に影写し行く
- 9 ハンチング目深に被り歳の市
- 10 十字路の一角に座す飾売
- 11 焼香の煙くゆらす年始
- 12 御干菓子のおづかな湿り寒椿
- 13 五拍子のピアノ曲とや雪催
- 14 枯蔓や地層斜めにくつきりと
- 15 湯ざめして函入本を戻しけり
- 16 カップ麺啜る境内笹子鳴く
- 17 木の芽どきタツチパネルを指で突き
- 18 春の浜きらりと光るシーグラス
- 19 豆の花静けさ纏ふ人のゐて
- 20 春燈やピザに少しの蜂蜜を
- 21 ジージャンの色落ちしたる梅日和
- 22 春の夜の薬膳カレーじんわりと
- 23 喧騒をよそに辛夷の花ひらく
- 24 長閑さや古着の丈を確かむる
- 25 朧夜の英字看板灯りけり
- 26 つちふるや古き写真の万国旗
- 27 ひと切れのキッシュ分け合ふ暮春かな
- 28 ジオラマの町に影なし燕来る
- 29 はつ夏の葉に青き紐通す
- 30 ゆるゆると新茶の茶葉の開きけり

- 1 立春や枕を鳴らす耳の脈
- 2 春草を踏む春草のこちして
- 3 息継ぎのなき囁りとなりにつけり
- 4 鳥去りてより白梅の佇まひ
- 5 水残るところ吹かれて春の泥
- 6 蛇穴を出づ山の風川の風
- 7 直角の膝に鞆や新社員
- 8 バーガーに手を合はせをり新社員
- 9 樹から樹へ風移りたる立夏かな
- 10 一の滝二の滝息を継ぐ間なく
- 11 滝飛沫すぐ深淵の色となり
- 12 相性の誰とも合はず水馬
- 13 命の名つく神あまた夏木立
- 14 千余年参拝絶えずほととぎす
- 15 しりとりに中国語入れ帰省の子
- 16 明日帰る長男次男若牛蒡
- 17 七夕笹翼のごとく畳まるる
- 18 城壁を越ゆる大樹や虫の闇
- 19 秋声やなきがら包むバスタオル
- 20 種瓢いつもの一間灯りをり
- 21 カーテンの内側に裸婦十三夜
- 22 食はれゐる蠅螂の斧宙を搔き
- 23 共食ひの翅残りゐる小春かな
- 24 さゆらぎの三四郎池冬に入る
- 25 靴音を追ふ靴音や冬木立
- 26 ごきぶりの足をひきずる冬日かな
- 27 寒灯齒の削らるる匂ひして
- 28 息を吸ふたびに尻浮き冬至の湯
- 29 寒鯉の大きな幅の水輪かな
- 30 羽ばたいて大白鳥の獣声

捕虫網

1 眠る子の浴衣くづさぬやうに抱く
 2 捕虫網風を捕へてよく膨れ
 3 蟪蛄の生るジュラ紀に億の朝
 4 心臓にこころの在り処昼寢覚
 5 水着より気怠き水を絞り出す
 6 相槌を打ちながら髪洗ひやる
 7 嘘泣にときをり余韻アイスティー
 8 兜虫尻ぶら下げて飛び去りぬ
 9 妻遅き夜に玉葱を薄く刻む
 10 くちびるはやさしき臍熱帯夜
 11 手火花に火の触れてゐる湖畔かな
 12 七節のいつまでも揺れつづけをり
 13 四列のうへに三列西瓜売
 14 赤とんぼ淋しき翅を震はせり
 15 玉入れの最後の玉を高く放り
 16 諫め宥めやうやく妥協夜業果つ
 17 深秋や仮名に正しきくづれ方
 18 半分に折りて秋刀魚の背骨捨つ
 19 無花果の傷には触れぬやう洗ふ
 20 怒りだと思ふ枯野へ消えし声
 21 枯蘆の鳥におほきく撓みけり
 22 妻と子の星散らしたる聖樹かな
 23 白息や笑つてもらふため笑ふ
 24 仰向けに鯛焼並べられてゐる
 25 風邪の床にて聞こえしを告げぬまま
 26 船頭の鴨鍋のことばかり言ふ
 27 鷹の眼を捉へし単眼鏡なりき
 28 貌上げて冬の蝦夷鹿なほ逃げず
 29 流水のゆつくりと裏返りたり
 30 追ひつかぬやう追ひかける春遊

- 1 うららかや取り分けてある黄身白身
- 2 春の土杭抜いてあり穴見えす
- 3 咲きたる椿落ちたる椿樂しさう
- 4 遠山はいまだ登らず耕せり
- 5 ばらばらに固まつてゐるわらび餅
- 6 つまづきてすこし羽撃く春の鴨
- 7 覗き込む眼映れり蜷の道
- 8 連翹は隣にはみ出して咲きぬ
- 9 手のひらも甲もつめたし花李
- 10 卒業式の長き譜面を抱へけり
- 11 睡るため瞼あるなり藤の昼
- 12 春の雨溜めて弁当箱は空
- 13 花冷や酔つて胸毛のよく見えて
- 14 南国の砂を底荷に夏の月
- 15 腰すこし使ふ仕事や梅雨茸
- 16 ががんぼの我を選んで来たりけり
- 17 笑ふたび揺るる影なり灯涼し
- 18 瓜冷す水飲みにくる家鴨かな
- 19 生身魂小さき陰に収まりぬ
- 20 目の慣れてきてきちきちの湧くごとく
- 21 一周を小さく回る秋の蜂
- 22 鯊釣や犬寄つてくる追ひ返す
- 23 虫売は虫を取り出すとき灯し
- 24 秋天や手裏剣のよく板に立ち
- 25 祝福のやうにとんぼう集まり来
- 26 あいまいに花野は尽きてまた始まる
- 27 ゆつくりと人の集まる昼の火事
- 28 冬麗や鳶の空を鷺が過ぎ
- 29 黒飴の中も黒なり窓に雪
- 30 息白しその白息をまた吸つて

- 1 足速くなる靴のこと豆ご飯
- 2 朝刊の次は夕刊籐寝椅子
- 3 時刻表遡りゆく蛞蝓
- 4 灯台に耳当ててゐる夏帽子
- 5 屏風絵の黴の西軍やや優位
- 6 右腕は右の肩より梅雨茸
- 7 太陽族竹の子族と踊りけり
- 8 手花火の描く円相らしきもの
- 9 短冊に誤字のせうせう星の恋
- 10 尾鰭つけ取り逃がしたる鰯のこと
- 11 黄落や京に千の華巖の間
- 12 寒灯と星まざりあふ機窓かな
- 13 冬帽のずれて佳境へ紙芝居
- 14 笑窪して届くアマゾン十二月
- 15 諾なりと応ふる息の白さかな
- 16 着ぶくれの七人掛けに七人目
- 17 水仙のほとりへ靴の跡寄りぬ
- 18 ぱちぱちと櫓は己を喝采し
- 19 無口より無口へ手紙春の雪
- 20 夫々に初蝶に遇ふ墓苑かな
- 21 しまひまで風船売の顔見えず
- 22 春風や青を探しに世界堂
- 23 春炬燵へ戻りゴルフの続きかな
- 24 シャガール展からの日永を上野まで
- 25 体調を心配されてゐる朝寝
- 26 鞘当てのはや始まりし雛の客
- 27 遠足の列を巻き取る象舎かな
- 28 側頭と油団に挟む腕かな
- 29 8ミリの中なる父や夏の海
- 30 お隣の風鈴のよく鳴りにけり

金魚

- 1 おとうとの二人目の嫁磯菜つむ
- 2 胸厚く水を押しゆく若布刈
- 3 若布干す播磨の風のあかるさに
- 4 醤油屋のおほきりヤカー春の猫
- 5 恋猫に魚とんでくる真昼かな
- 6 餅投げて進水式や桜まじ
- 7 穴子割く腸のうすべに海へ捨て
- 8 桐咲くや渡し場に船戻りくる
- 9 帆を張るやはつなつの肘尖らせて
- 10 蜜柑咲く島の「家島」四股名とす
- 11 麦わら帽小脇に船を売る話
- 12 船窓に縁のこつんとパナマ帽
- 13 井戸水にほのと潮の香羽抜鶏
- 14 手庇に風を読みたるヨットかな
- 15 海底をはしる水道夏つばめ
- 16 這ふ蛸に秤の針のゆれどほし
- 17 肌ぬぎのまたも飯粒こぼさるる
- 18 遠泳や浜に煙をくねらせて
- 19 島の子のつつかけ鳴らし夕河岸へ
- 20 夕風の路地にせり出す天麩羅屋
- 21 連山のごとき富士壺灼けてをり
- 22 おのが身を担ぎ舟虫百の脚
- 23 祭唄をんなごゑへと唄ひ継ぎ
- 24 内側におとうとのゐし夜店かな
- 25 掬はれて水に濡れたる金魚かな
- 26 父と子の息のこもれる祭獅子
- 27 夏まつり串に鶏皮毛羽立つて
- 28 祭笛もつとも高き音に果つ
- 29 湯あがりのうすき眉もて遠花火
- 30 海側へ畝つき崩す夏の果

- 1 出合ひ頭に蠅螂の敵となる
- 2 猫とはちがふ犬の手ざはり涼新た
- 3 蓑虫のゆらゆらゆれて留守である
- 4 子の額にわが手の余る月今宵
- 5 秋草へ飛び込んでゆく決勝打
- 6 日輪の白き影より冬ひばり
- 7 ひとつ息吐くやうに雪はじまれり
- 8 標識の色の褪せたり波の花
- 9 ぶつけては凹みて寒の紙袋
- 10 手袋を片方隠し帰さざる
- 11 春近し鳥の足跡踏みてゆく
- 12 出会つて別れて蜩蝶ひかりあふ
- 13 わたしよりすこし広がり春コート
- 14 風船を手離して手の語りだす
- 15 花篝花篝そのあはひを夜気
- 16 散つてみたり落ちてみたり八重桜
- 17 あしうでをたたみチューリップと坐る
- 18 一段づつかける掃除機春の昼
- 19 いつ雨の降るとも知れず袋角
- 20 入日ごと掬ひ上げたる泉かな
- 21 半分は夫の蔵書や梅雨深し
- 22 文庫から新書へ蠅虎の跳ぶ
- 23 紫陽花の白を疑ひ出してゐる
- 24 噴水に正しく水の暮らしをり
- 25 ででむしの殻の匿ふ昼の星
- 26 草刈の手首の白くひかりたり
- 27 ふあんと鳴らし電車は通過夏の夕
- 28 冷房に家電いきいき働きぬ
- 29 店員は掃除をはじめ夏の雨
- 30 百日紅咲き継ぐ夜の閉ぢにけり

1 買ひたての山の薄日や露のたう
 2 ぜんまいの綿に朝日を絡めとり
 3 残る雪今朝の足跡丸く解け
 4 四方の山歴々として鹿の子立つ
 5 甘酒や櫓立ちたる村社
 6 眠る子の腕輪の灯祭果つ
 7 樹に深く長き爪痕風青し
 8 海原のごとき笹薺夏帽子
 9 踊の輪二重になりて影の濃し
 10 嬰抱きて揺れたるだけの踊かな
 11 秋ともし革ひと縫ひの低き音
 12 語らひの果て新涼の月高く
 13 爐もみぢ沢辺に沸かす茶の匂ひ
 14 天窓の日の寒寒と丸太梁
 15 地図になき林道明し雪蛩
 16 冬の山ひとかたまりの獣の毛
 17 太薪を焚火二手に盛りけり
 18 やはらかき冬の日の斑や毘に鹿
 19 骸抜け血は凍土へ消えにけり
 20 水底の朽葉黒しよ鹿の死屍
 21 死屍の皮剥げば精肉年の空
 22 奉納酒あまねく照らす初日かな
 23 妻とある厨明るし紅葉鍋
 24 初日記鹿の休み場鹿の糞
 25 朝の窓瞬かせたるしづりかな
 26 メキシコの木彫傾げる雪の窓
 27 斜踏^{なぞへ}み獵夫の脚となりけり
 28 獵名残炉端に犬の寝言聴く
 29 春装の妻に駆け寄る犬の後
 30 クレソンの沢より村の朝眺む

ポテトサラダ

- 1 鉄板に牛脂泡立つ残暑かな
- 2 ネコ柄の弁当包み秋の風
- 3 二十年閉ぢたる辞書や秋団扇
- 4 くちびるに添ふ枝豆の軽き反り
- 5 成り損ねの実が裏側に黒葡萄
- 6 近道の風もありたる刈田かな
- 7 紙屋町西の人波しぐれけり
- 8 箆に干す切干箆の色帯びて
- 9 ケーキ屋の窓にぎやかや雪の朝
- 10 行儀良き虎屋の箱や松の内
- 11 御降や白磁の壺は光溜め
- 12 大寒や南蛮蕎麦の途切れ跳ね
- 13 寒灯やジムの熱気もそのひとつ
- 14 図書室に薔薇の絵が褪せ春隣
- 15 ミュシャ展に列や梅咲く園の傍
- 16 文字震ふ辞任届や春の風邪
- 17 湯けむりは夜風にくづれ沈丁花
- 18 逝くといふ言葉のんびり初桜
- 19 白がちのポテトサラダや春の雨
- 20 花冷や艶の失せたる将棋盤
- 21 清明や良き肉は良き煙生み
- 22 梔子の香のざつと来る校舎裏
- 23 江波行きの電車みじかし雲の峰
- 24 六月や目玉焼きちよと焦げて良し
- 25 黴臭き廊下や第五講義室
- 26 夏至の雲バスおほらかに遅れ来る
- 27 梅雨明や上顎にチヨコとろけさせ
- 28 氷鳴る麦茶やエンターキー叩き
- 29 ひとところ緑かがやく李かな
- 30 浴衣二枚干す水色と空色と

1 幕末の海岸線や蛭蓆
 2 羽蟻過ぐ鏡の中の口紅を
 3 浴室を磨く半日夏鶯
 4 徹に噎せ望遠鏡を分解す
 5 船の汽笛ナイターの灯を掠めゆく
 6 鯉の頭に睡蓮の葉の持ち上がる
 7 犬小屋のありし辺りの緑かな
 8 水草の花や母校は共学に
 9 五教科の頁ことごとく徹に
 10 紫陽花の裡に近視の植字工
 11 梅雨茸や庭の四隅を灯す如
 12 天道虫誤植の一字潰しゐる
 13 漣に散りばめられし花藻かな
 14 紙魚の跡くくと笑つてゐる如し
 15 百足虫掃き出す尾骶骨固くして
 16 羽蟻降るフロントガラスが荒野なり
 17 炎天やキリンが舌を振りたる
 18 曼陀羅の象の齒つぶら秋の空
 19 杖つかぬ時は手を組み菊花展
 20 絵を観たる後の年譜やうそ寒し
 21 スリッパより枯葉一枚引き抜きぬ
 22 馬鹿と開く口に当たりて雪礫
 23 留年の決まりし雪山のテント
 24 春の鴨見ゆ起き抜けの顔あげて
 25 現在も過去も見てをり剪定す
 26 分骨の旅藤棚に生まれり
 27 藤棚の中に一つの地方都市
 28 日輪に蝌蚪の両手の開かるる
 29 菖蒲田の隣り合はせに遅速あり
 30 二百字詰め原稿用紙菖蒲田は

連弾の椅子

- 1 春泥やいち早く木馬を降りて
- 2 青年の稜線納む春の闇
- 3 讚美歌を天より濡らす春の雨
- 4 箱の外の余震と鼓動春灯し
- 5 火葬場の春風を生む髪在先
- 6 桜薬降る廃線の蛇松線
- 7 春の月薄き硝子に蹲り
- 8 ガラケーと手紙の束と麦藁帽
- 9 骨壺の黒き十字架夏を刺す
- 10 街路樹の端は君だね青嵐
- 11 母親の腰掛けて待つ泉かな
- 12 あぢさるや黄泉の水たつぷりと吸ひ
- 13 老鶯や讚へ合ひたる山の墓
- 14 永いながい旅路の番を夏の星
- 15 水彩の梨油彩の林檎盛夏
- 16 此の世の余白消し去らむ大夕立
- 17 一輪に雨蛙座し今日も雨
- 18 瞬けば鳥の羽音や夏の朝
- 19 球体のアイスどこより溶け始む
- 20 夕焼は日々の擦傷雨止みぬ
- 21 白百合や瞼の奥を焼き尽す
- 22 檸檬絞つて飲めば涙が血にかはる
- 23 冬泉の底の小石に指が触れ
- 24 極月や平積みの学術書崩れ
- 25 鳥雲に片づけし連弾の椅子
- 26 脳に剃刀埋めたる春の雪
- 27 倒れ来し水仙猫の軽く跳ぶ
- 28 春の夜のラジオから突如伝言
- 29 胸より血をあたたためる曲朧月
- 30 修繕せし英国の傘花屑踏む

指切

- 1 永き日やラベル剥ぎゆく指の腹
- 2 急かさるる人も蒲公英の絮も
- 3 アクセルの遊び整へ龍天に
- 4 春の山ポテトサラダのハム薄し
- 5 花冷やばふんと閉づる炊飯器
- 6 胸高く羽ばたき合へる春の鴨
- 7 藤色の廃品シール竹の秋
- 8 畳屋の担ぎ来し香よ今朝の夏
- 9 窓開くやいなや風鈴鳴りにけり
- 10 姉妹かと思はせてをり薔薇の園
- 11 台詞みな吹き出しのなかソーダ水
- 12 蟻の列喝采のごと運び初む
- 13 滝しぶき話の少し戻さるる
- 14 蚊を逃がす私はろくでなしですか
- 15 振り向けば帰路となる道青しぐれ
- 16 上品に西瓜の種を出してをり
- 17 惜しみなくつつみて昏き蔦かづら
- 18 ゆるゆると上る鉄路や秋夕焼
- 19 母に子に終の一面木守柚子
- 20 流れ星いづれ忘れてしまふこと
- 21 赤門の閉ざされゐたり後の月
- 22 鳥の声追つて木の葉の風の道
- 23 ふくろふのかほ恙なく戻りけり
- 24 漣に鯨の呼吸思ふ日も
- 25 山眠るメトロノームの同期して
- 26 ペン先の摩る音かすか冬灯し
- 27 単三の電池買ひ足す聖夜かな
- 28 繰り返すあやまちくりかへす御慶
- 29 ルビに似し母の気遣ひ鱈葉
- 30 指切のごとき鉄鎖や深雪晴